

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2026年(令和8年)
6月5日 第757号

PDF版

国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2026年2月22日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

国立駅開業100周年 講演会

「堤康次郎とくにたち大学町開発」
に参加しての
古野 真紀子

国立駅が開業100周年を迎えた4月に先立ち、この街の成り立ちに深く関わった堤康次郎と国立大学町の開発についてのお話を聞く機会に恵まれました。

講師の老川慶喜先生は様々な講演に招かれ、予告を出すすぐに席が埋まってしまいう人気の研究者で、会場は開演前から期待に満ちた空気に包まれていました。先生はまず、ご自身の著書『堤康次郎 西武グループと20世紀日本の開発事業』(中公新書)について触れ、政治家としての堤ではなく、開発業者としての堤に焦点を当てるためこのような副題を付けたというお話をされました。

堤康次郎は滋賀県に生まれ育ち、上京後は早稲田大学で柔道部や雄弁会に所属し、多くの人と関わりながら様々な事業に取り組みました。こうした経験が、後の開発事業や政治活動の土台になったという話を聞き、若い頃からバイタリテイのある人物だったのだと改めて実感します。

大学卒業後も政治活動を続け、大隈重信が主宰する雑誌『新日本』の編集・経営をまかされた最初の号に「株式熱より土地熱へ」とのタイトルで「これからは土地の時代」といった論説が掲載されました。その言葉どおり、まもなく軽井沢の開発に乗り出したという流れについて彼の行動力に驚きます。

堤は箱根土地株式会社を設立し、サラリーマンのような新中間層に向けた事業を展開していきます。箱根や軽井沢の開発を進める一方で、開発に時間がかかることを見越して東京にも進出ししました。当時の東京は住宅不足が深刻で、郊外へ人口

が流れ、土地会社が次々に生まれていた時代です。堤は目白文化村の分譲を進めながら、「華族や富豪の土地開放」の時勢に乗り住宅地の分譲も行ったという話からは、彼の事業が社会の変化と密接につながっていたことが伝わってきました。

国立大学町の開発については、大学令の発布により広い敷地が必要になったことや、関東大震災の影響により大学の郊外移転が進んだ時代背景がありました。堤が後藤新平や大隈重信の後押しを受けて学園都市構想を進めたとされるものの、その真意を示す資料はまだ見つからないという話は、手が届きそうでなかなか届かない近代史の奥深さを感じさせました。大泉学園都市や小平学園の開発を経て、東京商科大学の谷保村移転が決まり計画を進める中で、堤はこの大きな事業に集中するため、都心の事業から手を引いたそうです。大学都市にふさわしい街づくりを求めた佐野善作学長とのやりとりも含め、国立大学町建設における彼の想いが伝わってきます。

終盤では、後藤新平について触れ、彼が台湾や満州で関わった都市計画と国立大学町の類似性についての話は、国立という街が国内外の都市計画思想とつながっていることを思わせ、大変興味深いところでした。また、箱根土地株式会社の社員で、学園都市の研究に海外派遣もされた中島隼との関りにも言及されました。

今回お話を伺うなかで、堤康次郎の開発のあゆみをより深く知ることができ、国立駅および国立大学町の成り立ち、それ自身の価値を改めて感じることもできたひとときでした。

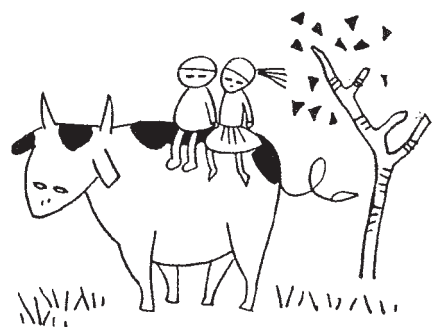
〈2026 年 3 月 7 日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

北村浩子 著

『日本語教師、外国人に日本語を学ぶ』

講座に参加して

こてがわ みどり
小手川 碧



フリーアナウンサーであり、日本語教師である北村浩子さんが、流暢な日本語を話す外国人 9 名へのインタビューを通して、「日本語」という外国語の山を登り続けて高みに到達した人たちには、どんな景色が見えているのか……という問いを探っていく。本冊はこの対話記録である。

私は、2025 年夏にこの本を読んでいたのですが、この本の著者の言葉でもっと深く話を聞いてみたいと思い参加した。

北村さんが公民館に来るまでの道中、南武線で聞いた「しばらくお待ちください」という言葉の「しばらく」の定義を日本語学習者に説明するのは難しい……という話からこの講座は始まった。

場面によって「しばらく」の時間の幅があると、私もこの初めて気がついた。電車の中の「しばらくお待ちください」と、メールの中の「しばらくお待ちください」は時間が違う。私も北村さん同様、日本語教

師であるため、日本語学習者に「しばらく」の定義を説明している場面を想像し、苦い顔をしている学習者の顔が思わず頭に浮かんでしまった。

ところで皆さんは、外国人相撲力士のインタビュー映像を見たことがあるだろうか。激しい取り組みを終えたあとにもかかわらず、日本語で質問を受けて即座に日本語でコメントをしている。それに、とても綺麗な発音と表現で。自然すぎて気づかない人も多いかもしれないが、毎日日本語を勉強してもあのような話方を習得できる日本語学習者はとても少ない。では、どうして外国人相撲力士が日本語をあんなにも完璧に使いこなせるのだろうか。

北村さんが、ジョージア駐日大使であるティムラズ・レジャバさんに「外国人相撲力士はどうしてあんなに日本語を使いこなせるのか」と、質問を投げかけた話や著書に書かれており、講座の中でも紹介されていた。それは、日本語母語話者からの視点では得られない回

答だった。私も読んだとき、感嘆してしまった話だったのだが、講座では、続きは本の中で……と明らかにされず。これを見ている皆さんも、本の中では非答え合わせをしてほしい。

日本語学習について一番有益な情報を持っているのは、日本語学習者である。勉強の仕方や日本語習得の考え方や、日本語母語話者には知り得ない豊富な情報と経験を持っている。私もしばしば日本語学習超級者にミニインタビューをすることがあるが、なかなか北村さんのような豊かな内容を引き出すことができない。北村さんのインタビューを通してもっとも様々な人の経験を体験したい。対話の中には、私達が外国語を習得する時にも役に立つ考え方がゴロゴロ転がっている。そして、日本語の姿も感じ取ることができる。生まれた時から日本語に触れている私達には感じ取ることができない日本語の姿。講座を通して、もう一度その姿に触れたくなってしまった。(小学館)

図書室のついで

『文化の脱走兵』

お話 奈倉 有里

(ロシア文学研究者、早稲田大学講師)

文化とは、人と人がわかりあうために紡ぎだされてきた様式のこと。戦争はこの「文化」を一瞬にして崩壊させてしまう、と奈倉さんはおっしゃいます。

戦う勇氣ではなく、逃げる勇氣を。戦争が身近に感じられる現代社会のなかで、自分に何ができるか悩んだり迷ったりしたとき、よりどころになる考えはどこにあるのでしょうか。

第76回読売文学賞(随筆・紀行賞)・第2回生きた本大賞などを受賞し、さまざまなメディアから注目されているエッセイ集をもとに、わたしたちが「いま」に向き合うためのヒントを得る時間になりたいと思います。

〈奈倉さんの本〉

表題作、『背表紙の学校』(講談社) ほか

とき 7月12日(日)

昼2時〜4時

ところ 公民館地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 6月12日(金)朝9時〜

電話または申込フォームより

☎042(572)5141



〈私の本棚から 第3回〉

蔵前仁一 著

『インドは今日も雨だった』

高遠 敬子



「インドを旅して、初めて一人前の旅人になれる」1992年南米で知り合った旅人に聞いて以来、インドはずっと憧れの土地でした。一方治安や衛生面、生きて帰れるか?といった不安が頭をよぎってなかなか勇氣が出せずにいました。ちょうどその頃、ユーラシア大陸横断中の妹から「チベットのラサにいますよー。星空がすごい!」と1本の国際電話がかかってくる。星がきつかけとなり「インド、ネパール、チベット行き」を一大決心。もちろん蔵前さんの本にも大きな影響を受けていました。蔵前さんは、1980年〜現在まで旅人として、エッセイを数多く出版されています。また、この本に出てくる富永さんは、実は私の友人です。90年代トルコの旅先で知り合った方です。富永さんは旅人にとって大切な情報を盛り込んだ地図を、町の店や宿に掲示してくださるような方でした。

物語はその富永さんより、チベットが記念式典で現在入れないとの情報が入る所から始まります。蔵前さんはチベット行きを諦め、インド北部のチベット文化圏へと向かうのです。旅の移動手段はバス。今みたいはスマホで比較検討、適正プライスというわけにはいかなかった90年代。一軒一軒お店を探して歩くことに!「おーい、ジャパニ(日本人)、ノーたかい(安いよー)」と言う客引きのお兄ちゃんを横目に、キッチンとしてそうな旅行代理店へ。デラックスバスのチケットを安く購入したのも

くにたちブッククラブ

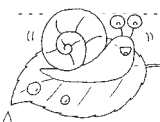
—なぜ、その道を選んだのか—
羽田圭介
『スクラップ・アンド・ビルド』
(文春文庫)

講師 深津謙一郎
(共立女子大学・日本近代文学)

とき 6月11日(木)
夜7時半〜9時半

ところ 公民館3階講座室

申込先 公民館 ☎042(572)5141
またはホームページより申込



* 次回は7月9日(木)
朝比奈秋『植物少女』
(朝日文庫)です。

束の間、乗ってみたら、あーあ、とんでもない所に。結局ローカルバス(インドのタタ社製のバス)を乗り継ぐことになるのです。このローカルバス、木製の直角のベンチシートで、舗装のないカーブだらけの山道をオンボロのサスペンションで、体が飛んでいきそうになりながら必死に乗りたくてはならないのです。私もインドで体が椅子から落ちそうになりながら、頭を窓に打ちつけながらも疲れのピークから寝てしまったことを思い出しました。

さてさて、蔵前さんは、なんだかんだと目的地のチベット文化圏まで辿り着き、色々な人々と交流していきます。ほのぼのとした蔵前さんのイラストやテンポの良い会話からトラブルさえも笑いのエピソードになっていく様子が鮮やかに描かれます。人間色々あっても最後にはなんとかなるんだなということを改めて教えてくれました。

さてさて、30年前のインドと今のインド。違っているかな? いや、根本は変わっていない?! 蔵前さんの本を読んだら、益々インドに行きたくなくなりました(笑)。(講談社文庫)